

仙人峠

私が電波高校を卒業し、宮古鍬ヶ崎、磯崎漁業部に赴任する時、生家から一日では宮古に行けないので、一年間下宿していた。いつも仙台原ノ町の叔父さんの家に泊めて貰い、朝一番の列車で出発していた。

盛岡から山田線で宮古に行ければ、生家からでも一日で行けるが、当時山田線は水害でズタズタで不通だった。花巻で乗換え、遠野からは、昔、生家の近くを走っていた軽便鉄道に乗って仙人峠で下車、仙人が居そうな急な細い坂道を、荷物を背負い木に掴まりながら、約三時間近くもかかり、釜石線の大橋駅まで歩く。宮古に着いた時には、日が暮れてしまっていた。うら寂しい駅舎が記憶の底に残っている。それから鍬ヶ崎の会社まで、三十分以上歩かなければならない。

仙人峠を歩っているとき、仙台から宮古に帰る、一人の私より少し若い女性と道連れになった。仙台の高校を卒業後、宮古に転居し、弟と母親の三人暮らしだと言っていた。

駅より鍬ヶ崎の会社まで、送ってくれた。知らない土地での親切は有り難かった。名前は せつちゃん、どんな字を書くのか、忘れてしまった。母親と弟の名前も思い出せない。磯丸に乗船し約二週間で漁を終え、港に帰って来る

せつちゃんが岸壁でいろいろ食べ物を手籠に入れて待っていた。誘われ、港が見える高台の、原っぱで持ってきた弁当を広げ、ピクニックの様にご馳走になった。

入港した時は、船員全員で分ける魚を持って、宮古駅近くの彼女の家に遊びに行く。アメリカ製の音質のよいスピーカー

ラジオを貸したり映画を見に行ったり、自由に交際していた。仲間の船員に「局長手が早いな、もう彼女見つけたのか」と冷やかされた。少し長い休みに生家に帰るとき、泊めてもらい朝早い列車で帰郷した事もあった。

こんな事が半年ばかり続いたが、貸しておいたラジオを返して貰ってから、交際はプツンと切れてしまった。ラジオは貰ったつもりで居たのだろう、私は結婚など考えなかったし本当の田舎者で、小さな漁船の通信士である。自分ながら魅力のある人間とは思わない。親子して考え、交際を止めたのだろう

母親は仙台でオメカケさんだったと、誰かに聞かされた。あか抜けした人であった。駅前を下駄屋さんを出していたようだ。初めは結婚させようと、母親が思っていたふしがある。

ロマンスなんて言う程でもないが、淡い思い出である。



現在の仙人峠(周り道)